
機動乱世ガンダムSURVIVAR

柳雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動乱世ガンダムSURVIVAR

【Nコード】

N5526P

【作者名】

柳雨

【あらすじ】

憎しみと殺戮の連鎖を絶えずに増やす戦争はやがて地球連邦軍を狂気に駆り立てた…彼らが禁断の破壊兵器『ラグナロク』を世界規模で展開・発動したため、世界は秩序と共に崩壊してしまい、この世は犯罪と暴力が絶えぬ無法の荒野と化した…そして、人々は巨大にして強大な性能^{ちから}を秘めた人型機動兵器『^{モビルスーツ}MS』を、この弱肉強食の乱世を生き抜く手段として駆る…

（前書き）

本作はガンダムシリーズを元にした二次創作です…尚、目茶苦茶過ぎるとんでもない世界観やバイオレンス描写などもありますので閲覧の際にはご注意ください（汗）

- 人類の歴史は度重なる戦いの繰り返し…人々はその愚かしさにすら気づかずに狂った様に相手を憎み、殺し続けた。

- そして人類はついに戦争の終止符を打つべく、『禁断の兵器』に手を出した…大規模大量破壊兵器『ラグナロク』、その威力は核をも上回り、配置・発動しただけで簡単に国一つ滅ぼせるということんでもない代物である。

- 地球連邦軍はこの存在自体が正気の沙汰ではない兵器を世界中に配置し、一度に全てを発動させて世界を文字通り『破壊』してしまい、人類の大半が消し飛んでしまった。

- だが…人類は死滅しなかった、しかし、同時に文明と秩序の崩壊を導いた。

- 世界は無法の荒野と化し、各地で略奪・破壊・殺戮が起きた…その手段として『MS』^{モビルスーツ}と呼ばれる人型機動兵器が使われ、犯罪を行う者も、それらから守るための自衛としてMSを駆った…。

- とある村。

- 荒廃した世界の中では比較的平和を保っていた小さな村だったのが…。

『さてさて…行きますよ、アナタ達。』

『ハッ！！』

『ハッハー！！』

・村から離れた崖の上から遮光器土偶の様な細い眼をした黄色いボデイのMS・シャッコーに乗ったパイロットの指示を筆頭に、顔に赤く輝くモノアイがあり肩にはスパイクをつけた緑色のボデイのザクII、俗に『ガンダムタイプ』と呼ばれる形状に白と赤を基調にした量産型MS・ムラサメのパイロット達が一斉に叫ぶ。

『突撃イイイイイーツ！！』

『イヤッハアアアアー！！』

・シャッコーの『突撃命令』が入るや否や、ザクとムラサメの一団が武器を片手に、崖を下りながら村へと一気になだれ込んだ。

『うわあああああ！？』

『賊だ！賊のモビルスーツだ！！早く逃げ…！！』

『ギヤアアアアアー！！』

・村人達は悲鳴を上げながら逃げ惑うも時既に遅し…ザクのマシンガン、ムラサメのイーゲルシュテルンやビームライフルによる射撃に巻き込まれたり、巨体な脚によって踏み潰されて血をブチ撒けてグチャグチャになり、建物は爆発を起こして破壊され、村全体は紅蓮の炎に包まれてしまう…まさに阿鼻叫喚の地獄である。

『ヒヤヒヤヒヤヒヤ！一つの村が燃える戦火に包まれる光景というものはいい眺めですねエ』…奪う物奪ったらさっさと撤収です。』

『了解！しかし我々モビルスーツ乗りにはいい世の中になったもんですよ！威張りくさった連邦は既にラグナロクで壊滅、おかげでやりたい放題で腹一杯ですぜ。』

『全くだす…ククククク…！』

- シャツコーのパイロットとザクに乗るその部下は変わり果てた村の様子を見てケラケラ嘲笑いながら撤収…村を後にした。

- 彼らが言う様に、ラグナロクの影響でそれを開発・投入した連邦は既に崩壊、軍としての機能は完全に消滅したため、彼らの様なならず者のモビルスーツ乗り達による世界の無法化に拍車をかけていた…これが今の世界の現状である。

- 空。

『ん』…空が蒼いです』

- 戦闘機のような形態…モビルアーマーMAの状態で飛行する可変式MS・トールス、本来は黒などを基調カラーにしているがパイロットの趣味か、青いカラーリングになっている。

・コックピットに乗るのは空の色を思わせる淡い蒼のロングヘア、輝く様な銀色の瞳、首にはゴーグルを提げている少女、彼女はトールスを縦横無尽に動かしながら飛行を楽しんでいた。

・しかし、そんな最中…地上のとある廃工場では。

「畜生、『また』俺達を襲う気か!？」

「対空砲を用意しろ!撃ち落としてやる!！」

・対空砲の準備をする人々が空を舞うトールスを怒りの籠った眼で睨みつけ、狙いを定めて砲撃準備に取り掛かり…。

「発射アツ!！」

『ふえ!?!きゃあああああ!!!』

・対空砲から勢いよく砲弾が発射され、トールスは撃墜…爆発こそはしなかったが廃工場近くに不時着し、パイロットの少女は気絶してしまう…。

・廃工場・地下室

「よし、この部屋に閉じ込めておけ。」

「おう!」

・気絶したパイロットの少女は青年達に担ぎ込まれ、地下室の牢屋

に閉じ込められてしまった。

「ケツ！またマヌケがとっ捕まったみたいだな。」

「うるさいぞ！黙ってる！」

「おー…怖ッ。」

・彼女が閉じ込められている隣の牢屋にも一人…黒毛混じりの赤い天然パーマがかかった髪に如何にも『ひねくれ者』という印象を与える顔つきの少年が悪態をついたため、青年のうちの一人が鉄格子を蹴り飛ばして黙らせようとしたが、少年がふざけた態度を取ったため一瞥した後サッサと消えてしまった。

「…ん？ここはどこですか？」

「お？なんだ…女の子だったのか？」

・ここでもうやく少女が目覚めた、隣の牢にブチ込まれたのが女の子と解り、少年は鉄格子の隙間から顔を出して彼女の顔を見ながら一応ここがどこかを説明した。

「あー…コホン、お嬢さん…ここはどっかの軍事工場跡、で、オレ達はその地下牢に入れられちまったみたいなんだ。」

「え…ええッ！？どうしてですか！私、何も悪いことなんてしてませんよー！？」

（…なんか面白い娘だな。）

・大袈裟に、それでいて可愛らしく慌てて驚く彼女の反応を見て少年はのほほんとそんな感想を持った。

「あと、君もモビルスーツ乗りでしょ？オレもそうなんだ…ったく！アイツら！！オレのジムをブツ壊しやがって…！！」

「あなたもですか？私もトールスを撃たれて…気づいたらここに…。」

・彼女をモビルスーツ乗りと断定するあたり、どうやら少年もモビルスーツ乗りらしい、愛機であるジムをこの工場の人々に破壊されて完全に御立腹だ。

「なんでもさ…この工場に居る連中は元々は少し前まではちよつとした村に住んでた連中なんだけど、モビルスーツ乗りのゴロツキ集団に村をやられてその生き残りがこの工場に居着きはじめたんだ…。」

「え…？」

・少年の言葉に思わず息を呑み、少女は黙ってその話に聴き入っていた…。

「それ以来何かとモビルスーツ乗りを誰彼構わずに毛嫌いして近寄る奴は元から対モビルスーツ用に設置されてる対空砲とか、そういう兵器で攻撃すんだよ…オレ達はまだ運がいい方さ、生きてるしよ、ついてない奴はモビルスーツごとオダブツさ。」

「…そんな…ことが…。」

・少年から聞いたここにいた工場の人物達のやっていることに対し、完全に言葉を失う少女…。

「…で、運よく生き延びたとしても、今こうして取っ捕まえられて…噂じゃあ『銃殺刑』にされるってさ。」

「銃殺…！？そんな…うつ…。」

「お…おい！？泣くなつて！オレが悪いみたいじゃん！？泣かないでくれよ！」

・殺されると聞いて泣き出したため、少年は彼女を落ち着かせる。

「けど全く可能性が無いわけでもないからさ、ともかくここから脱出しねえとな…針金なんか持っていないか？カギを開けるか、ら…？」

「ほえ？」

・牢屋のカギを開けるために少年は少女から針金みたいなものを要求…しかし、言い切る前に少女はカギを開けてしまっていた。

「あなたも出してあげますから待ってくださいね♪あ、申し遅れました…私、シルフ・エアメントと言います♪」

「あ、ああ…ありがとよ、オレは斗嶋琉我、リュウガとしま・リュウガでいいぜ。」

・少女…シルフは、呆氣に取られる少年…リュウガの牢を開け、互いに自己紹介を通した後、脱出した…が。

「地下室、広ッ！！出口どこだよ！？」

「あうっ…疲れました…。」

・そう、二人が閉じ込められていた牢屋がある地下室があまりにも広過ぎたために、一向に出口に出られずに疲れてその場にへたり込む…すると。

「わっ…キャッ！？じ、地震…！！」

「やつべ…！！地上で何か起きてんな！？急ごうぜ！！」

・突如、地響きが発生…強い揺れに危険を感じた二人はその場から立ち上がり、足早に脱出を急いだ。

・一方、地上では…。

『ヒヤヒヤヒヤ！！こんな貧相な兵器が私達に通用すると思いますかあゝ？あゝ？』

「クソオツ！！オレ達の村を襲った奴ら…またッ！」

・彼らの村を襲ったシャッコーをリーダーとしたザクやムラサメなどで構成されたモビルスーツ軍団が村の生き残りがいる工場を襲いに来ていた。

・村の生き残り達は対空砲やトーチカ、ミサイルランチャーなどで対抗するも、如何せん相手の方はほとんどがプロのモビルスーツ乗り揃い、それらのものは容易く次々破壊されてしまう…。

『今更アナ達みたいな死に損ないに用などありません♪私達はその筋の情報で聞いたこの工場に「隠されてる」モビルスーツを取りに来ただけです、サツサと尻尾巻いて惨めにお逃げなさいよ♪』

「なんだと…！？そんなもののために…チクショウ！ふざけるなよッ！」

・シャッコーのパイロットが言うには、この軍事工場ではラグナロク以前に極秘で開発されたというモビルスーツが隠されているという情報があるという、村の生き残り達からして見れば迷惑この上ない。

『退くつもりが無いならお死になさい！！』

「ギヤアアアアア！！」

「うわあああああ！？」

・シャッコーはビームライフルで彼らを射殺、ビームを食らい、跡形も無く生き残り達は消し飛んだ…。

『フフ…こんなムシケラ共の命など、これから手に入れるモビルスーツに比べたらカスみたいなものです…アナタ達も邪魔者は始末してしまいなさいッ！！』

『『『うおおおおおおお!!』』』

(か…神様…助け…!!)

・モビルスーツ軍団により、次々蹂躪されていく人々の命…なす術無しの弱者達はただただ祈ることしか出来なかった…。

・場所は変わり、工場地下室のシルフとリュウガは…。

「ん？ここが出口なのかも…けど、暗証番号が必要みたいだな。」

・リュウガは出口らしき扉を発見、しかし、ロックがされており、決められた暗証番号を入れないと開けられない仕組みになっていた。

「参ったな…こんなのがあるんじゃ…。」

「開きましたよ?」

「そうそう…開いちゃったって、何iiiiiiiiiiiッ!？」

・困るリュウガだったが、またもやシルフがやらかした…いとも簡単にロックを解除してしまったのだ。

「適当にやったら開いちゃいました♪」

「もうッッコミ切れねえッ!何この娘!？」

・イロイロと器用にやらかすシルフにリュウガはッッコミまくる

が、今は命が大事なため、出口らしきこの扉に入り込む…。

「な…！？」

「こ…これって…？」

・そこで二人が見掛けたもの…それは二体のガンダムタイプのモビルスーツ。

・一体は白と薄い青を基調とし、背中には四対の純白な天使の翼が生えている。

・もう一体は黒を基調とし、背中には悪魔の如き漆黒の翼が生えていた。

「スツゲエ！？ガンダムタイプだ！ムラサメとかの量産型じゃない純正のガンダムだぜ！！」

「わあ…綺麗…♪」

・リュウガは初めて見るガンダムタイプ…悪魔に似たガンダムに興奮しており、シルフは天使のガンダムの美しさに見惚れていた。

・ちなみに純正ガンダムタイプはザクやジムなどの非ガンダムタイプのモビルスーツやムラサメなどの量産型と違い、その機体に秘められた性能とパワーは絶大であり、ラグナロク以前でも最強とまで謳われている、まさにモビルスーツの中のモビルスーツとも言える存在であった。

「…っと、揺れが強くなった！コイツらに乗って脱出だ！！」

「はい！！」

・早速二人はそれぞれのガンダムのコックピットに乗り込み、機体を起動させて脱出準備に取り掛かる。

「シルフ・エアメント…ウイングガンダムセラフィム！出撃です！！」

・シルフは『天使』の名を持つ白き破壊の翼〃ウイングガンダムセラフィムを起動、バーニアを吹かしてハッチから飛び立った。

「ガンダムデスサイズギルティ！斗嶋琉我！行つくぜエツ！！」

・リュウガは『罪』の名を持つ漆黒の死神〃ガンダムデスサイズギルティを起動、シルフのウイングセラフィムに続く様に脱出した。

・そして地上。

『うわ！？…何があっただんだ！？』

・リュウガはデスサイズギルティのモニターから外の無残な光景…破壊された燃え上がる施設や血を流して倒れる死体の山を見て思わずそう言った。

『ひどい、誰がこんなこと…！！』

『私達ですよ。』

『『!?!?』』

・ウィングセラフイムとデスサイズギルティは突然の声に振り向く
…するといつの間にかシャッコー達に完全包囲されていた。

『探す手間が省けました♪さあーそのガンダムタイプに乗ってる人達、サッサとそれを私達に寄越しなさい、そうすれば命だけ…。』

『お断りです!!』

『は…ちょッ!待っ!?!』

『『隊長ー!?!』』

・シャッコーからの申し出を速攻で断り、シルフはウィングセラフイムを操作して頭部からマシンキャノンをシャッコーに向かって発射した。

『オイイイイイツ!?!何してんのー!?!この数相手に喧嘩売ってんだ!』

『このガンダムもリュウガさんのガンダムもあんなひどい人達に渡したくないし…何よりあの人達のやったことが許せないからです!』

・リュウガからツツコミを入れられるがシルフはシャッコー達がやらかした鬼畜の諸行に対して憤りを感じているらしい。

『…だあゝ!もう!!しゃーねーなー!!奴さん達、どのみち逃が

してくれそうにねーし…一丁ブチかましてやるかアツ！！」

「…リュウガさん」はいッ！！」

「ざけんなアツ！！アナタ達！やっておしまいイッ！！」

「『オラアアアアアアア！！！』」

・デスサイズギルティでやれやれなポーズを取らせながら渋々リュウガはシルフと共に戦うことを決めた…これに対してシャッコーはブチ切れ、部下をけしかける。

「『ウラアツ！！！』」

「『くたばれッ！！』」

・ウィングセラフィムにザク四機、ムラサメ二機が攻め込むが…。

「『そこッ！！』」

「ガッ！？」

「うぎゃッ！！」

「どひいッ！？」

・ウィングセラフィムは飛翔しながらビームサーベルを二本取り出してこれらを華麗な剣捌きで次々に斬り裂いて爆発させる。

「『…』」

(OK! 後ろから…!!)

・ウイングセラフィムと目の前で対峙しているムラサメの首を軽く振る『合図』を見て、ウイングセラフィムの背後に回るザク…そして肩にザクバズーカを構え…。

(死ねエーッ! ガンダムッ!!)

・発射、ロケット弾がウイングセラフィムの背中目掛けて真っ直ぐ進む…だが。

『やあッ!…!』

『は!?! ぶべらっ!!』

『オイ!?! 何ミスって…はべらッ!!』

・ウイングセラフィムはその場で急に背後へと振り向いてビームサーベルを一本投げつけ、ロケット弾を撃ち落とした上にザクの胸(コックピット部分)に命中させ、さらにはもう一本でムラサメを真っ二つに叩っ斬った。

『スゴイです…この子の「ゼロシステム」、おかげで次に何をすればいいか解ります♪』

・『ゼロシステム』、正式名称『Zoning and Emotional Range Omitted System』(『領域化及び情動域欠落化装置』)とは、分析・予測した状況の推移に応じた対処法の選択・結末を事前に搭乗者の脳へ直接伝達するシス

テム：端的に言うと、勝利するために取るべき行動：即ち『未来』をあらかじめパイロットに見せる機構である。

・ウイングセラフィムが背後からの不意打ちに気づいたのもこのゼロシステムのおかげである。

・しかし、ゼロシステムは『確実な勝利』のためには時に、手段を選ばない戦法：つまり、搭乗者の意思や倫理に反する行為も平然と選択してしまい、状況によっては搭乗者自身の死や機体の自爆、友軍の犠牲もいとわぬ攻撃など、非人間的な選択が強要されることもあり、これがパイロットの精神に多大な負担をかけ、その結果、システムを抑え込む程の強い精神力を持たぬパイロットでなければ『暴走』を起こし、よくて発狂・恐慌：最悪な場合、廃人化やパイロット自身の死に繋がる危険なシステムである。

・だが、それはこのウイングセラフィムの元となった原型の機体『ウイングガンダムゼロ』に搭載されている『オリジナルのゼロシステム』ならばの話である…。

・ウイングゼロの『量産機』として開発されたウイングセラフィムには一般兵でも扱える様に改良され、精神の負担の緩和させたその名も『ゼロシステムVer.2.5』が搭載されている…よってシルフは初めてこの機体に乗ってゼロシステムを起動させているにも関わらず、暴走もせずに『確実な勝利』のための行動が出来たのだ。

・一方、リュウガのデスサイズギルティは…。

『クソッ！！あの黒いガンダム野郎！どこに「消えた」！？』

『探せ！まだ近くにいるはずだ！！』

・そう…突如、デスサイズギルティがザクやムラサメ達の目の前から文字通り『消えてしまった』のだ、おかげで彼らは完全にうろたえ、現在デスサイズギルティの搜索をしているのだ。

『チツ…一体どこに居や…ガアツ!?!』

『いいッ!?!』

『なんだ!?!首…首がアツ!?!』

・なんと、いきなり何の突拍子も無しに仲間のムラサメの首が撥ね飛んでしまったためゴロツキモビルスーツ乗り共に動揺と得体の知れない恐怖に駆られ、混乱してしまう。

『ギッ!?!』

『ぶふッ!?!』

『ぐあああッ!?!』

(へっへへ…♪)

・正体不明の攻撃で首を撥ねられ次々爆発していくザクやムラサメ…そして爆風が晴れたと同時に、大鎌型の武器・ビームシザーを構え、悪魔の翼を模した防御装甲・アクティブクロークを展開しながら『透明』なデスサイズギルティが徐々に実態^{すがた}を表わした。

(この『プリズムコーティング』がある限りオレに攻撃は出来ねーよッ!?)

・元になったモビルスーツ『ガンダムデスサイズヘル』にはステルス技術を応用した電波妨害装置『ハイパージャマー』があるが、デスサイズギルティにはその代わりに本格的なステルス機能…全身の装甲にプリズム粒子という特殊な粒子による『プリズムコーティング』が施されており、標的から見た角度に対してのみ、装甲の構成面レベルで自機の姿を『完全に』消す事の出来る。

・いわばデスサイズギルティは特殊ステルス機という名の『見えざる死神』…その姿を捉えることはほぼ不可能なのだ。

『いやアゝ』純正のガンダムはいいもんだぜエツ』このデスサイズギルティをやるもんなら…やってみやがれやアツ！！』

『『うつぎやあああああああゝ！！？』』

・…リウガはこのデスサイズギルティがムラサメ同様、『オリジナル原型』を元にした量産型とも知らずにガンダムタイプというだけで浮かれ、敵の悲鳴を聞きながら、嬉々として次々に狩って行ったという…。

・ウィングセラフィムとデスサイズギルティはあくまでもウィングゼロとデスサイズヘルを元にした『量産型』に過ぎない…しかし、この二機はオリジナルに迫るスペックを誇る、故に…。

『たあああああ！！』

『おりゃああああ！！』

『『ひ、ひーでーぶーツ！！』』

- 負ける道理は無い…気づけば敵の機体はもうシャッコーしか居なくなっていた。

『ヒ！？な…なんて強さですか…ええい！ガンダムとパイロットは化物かッ！？』

- シャッコーのパイロットは完全にウイングセラフイムとデスサイズギルティの性能に飲まれていた…そして腕に装着していたヘリコプターのローターを模した飛行装置・ビームローターを回転させて飛び立ち、一人だけこの場から逃げ去ろうとしていた。

『ヤロ…！飛んで行きやがった！？』

『逃がしません…ターゲット・ロックオン…！！』

- シャッコー逃亡に慌てるデスサイズギルティ…しかし、ウイングセラフイムは長い銃身が特徴の巨大なビームライフルにして最強の保有兵器『バスターライフル』を構えて狙いを定める…。

- ちなみに二丁のバスターライフル…ツインバスターライフルを持つウイングゼロと違い、量産型故に生産コストの問題などでウイングセラフイムの場合、バスターライフルは一丁だけである。

『発ッ射あああああッ…！！』

『ヒッ…！？やめてとめてやめてとめ…ギャアアアアアアアアアアアアアアッ…！！』

- バスターライフルの銃口から高出力の破壊力を持つビームが放たれ、見る見るうちにビームに包まれたシャッコーからパイロットの

無様な絶叫が響き渡り、この世から一切の塵も残さずに完全消滅してしまっただ。

『よっしゃ！やったな！シルフ！！』

『はい♪リュウガさん♪』

・デスサイズギルティとウイングセラフィムは互いの手を取り合い、嬉しそうにピョンピョンその場で跳ねて戦闘に勝利したことに喜んだ。しかし、そんなモビルスーツ二機の姿はどこかシュールにさえも見える。

『ん…あ！？見てください！生き残ってる人達もいますよ！みなさん！悪い人達はもういませんから安心してくださーい♪』

『あん？おいおい…コックピット開けるなよ、無用心だなあ。』

・どうやら僅かながら生存者が居たらしく、シルフはコックピットを開けて笑顔で手を振った、そんな様子をリュウガはモニターで見ていた…。

・だが非情にも…返ってきたのは称賛の言葉では断じてなかった。

「うるさい！今すぐ出て行け！！」

「え…？」

・シルフとリュウガを牢屋に閉じ込めた青年の罵声に絶句するシルフ…さらにそれに続くかの様に。

「モビルスーツ乗りは帰れ！！」

「返してよ…私達の家族や兄弟を！！」

「この悪魔ツ！早く出て行けってんだよーッ！！」

・憎しみ・悲しみ・怒り…そういった感情を全て二人にぶつけ、騒ぐ一同。

「あの…リュウガさん…あの人達は、なんで…？」

『…あいつらにしてみりゃオレ達もさっきの連中と同じにしか見えないんだろっよ…所詮モビルスーツは人殺しの道具だしな。』

「そんな…！！」

・残念ながらリュウガの話は正論である…この時代においてモビルスーツという強大な兵器は弱者からして見れば畏怖の存在に過ぎない、いくら人助けなんてしても彼らには被害をイタズラに広げる様な疫病神か何かにしか思えないのだ。

「サッサと消えろ！どっか行っちゃまえ！！」

「キヤアッ!？」

『あ!？』

- 生き残った人々のうちの一人が石を拾ってシルフ目掛け投げつけた…避ける間も無く、シルフの額に石が命中してしまい、赤い雫が滴り落ちる…。

『…てめえらアッ!!今投げた奴はどいつだ!？この…!!』

「ヒッ…!？」

- さすがに今の投石は許容しがたい仕打ちだったため、怒りのあまりにリュウガはデスサイズギルティの拳を振り上げるが…。

『…やめて!!やめてください…お願いします…。』

『…わーったよ。』

- 慌ててウィングセラフィムを操作してデスサイズギルティの腕を掴んで止めるシルフ、リュウガは諦めた様に腕の動きを止める。

『…そうだな、こんな奴らでも…殺しちまったら、あいつらと同じになっちまうよな。』

『…はい。』

「「「…。」」」

・危つく彼らを襲ったモビルスーツ乗り共と同じことをやってしま
うところだった…ギツと唇を噛み締めて、二人は最後に怯える彼ら
の顔を焼きつける様に見た後、その場から立ち去った…。

「なあ？もうケガとか血は大丈夫か？」

「はい、平気です…。」

・互いにモビルスーツから降りて、リュウガはシルフにケガのこと
を聞く、幸い大事には至らなかったものの、やはりあの仕打ちには
堪えたか、暗い顔のままである。

「…あんな恩知らずな奴ら、もう放っておけ…あゝ…ほら、また泣
く。」

「す、すみません…。」

・リュウガはシルフから涙が零れたのを見た…あまりにも悲しそう
だったので、思わずハンカチを差し出した。

「ほらほら！いつまでもんな暗い顔してたら幸せ逃げちまうぜ？」

「ありがとうございます…。」

・照れくさそうに言うリュウガにシルフはようやく涙が止まり、穏
やかな笑みを浮かべた。

「さてと…デスサイズギルティ脚も手に入っただし、どうすっかな…。」

「だったら一緒に行きましょうよ！一人で旅するより二人の方が楽しいですよ」

・ 今後をどうするかを考えるリュウガ：だったがいきなりのシルフの提案にやれやれなポーズを取る。

「はあ：アンタ、人から天然って言われない？まっ：それもまた一興か。」

「はう！？なんで解るんですか！！」

「図星かいッ！！」

・ っつと、こんなやり取りがあり、二人は共に旅立つことにした。

・ 崩壊した世界を強く生きる二人のモビルスーツ乗りの少年・少女、そして荒廃した大地を駆ける黒い死神とどこまでも蒼く広いを飛んで行く白い天使：無法と滅びの乱世の世に何を見るのか？

（後書き）

本作に出たウィングセラフィムとデスサイズギルティは『新機動戦記ガンダムW』ティエルの衝動』という漫画からの出展で私も内容を掴みきれれておりません（おい作者！）、ちなみにこの漫画は現在では絶版なため、作品・モビルスーツと共にその存在の知名度は限りなくゼロです（汗）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5526p/>

機動乱世ガンダムSURVIVAR

2010年12月18日15時30分発行